

援助動機と非援助動機の関連性について

その他のタイトル	A Study of Relationship between Helping Motives and Non-helping Motives for Prosocial Behavior
著者	高木 修, 竹村 和久
雑誌名	関西大学社会学部紀要
巻	16
号	1
ページ	51-65
発行年	1984-12-21
URL	http://hdl.handle.net/10112/00022745

援助動機と非援助動機の関連性について

高木 修・竹村 和久

A Study of Relationship between Helping Motives and Non-helping Motives for Prosocial Behavior

Osamu Takagi and Kazuhisa Takemura

Abstract

The purpose of the present study was to make clear the relationship between helping motives facilitating prosocial behavior and non-helping motives restraining prosocial behavior. Subjects (191 university students) rated the likelihood for each of 25 helping motives as a cause of helping and for each of 26 non-helping motives as a cause of non-helping. The correlations between motives were calculated by using the rating scores. Then, the matrix of the correlations was subjected to factor analysis, canonical correlation analysis, and group axis method. The main results were as follows. (1) Two domains of helping and non-helping motives were somewhat related. However, the relationship was not a reverse one. At least, they were not linearly dependent. (2) The relationship structure between the two domains of helping and non-helping motives was quite complicated. That is, the literally similar motives did not always correspond in the actual relationship between helping and non-helping motives. These results suggest that the researcher must examine the prosocial behavior from both points of helping and non-helping motives.

key words : helping motives non-helping motives structure of motives prosocial behavior helping behavior non-helping behavior bystander effect helping cost helping reward altruism

抄 録

この研究の目的は、援助動機と非援助動機の関係を解明することである。

191名の大学生は、25個の援助動機が援助の原因になると思う程度と、26個の非援助動機が非援助の原因になると思う程度を評定した。この評定得点を基に、動機間の相関値が算出された。そして、その相関行列に因子分析法、正準相関分析法、およびグループ主軸法などの多変量解析法が適用された。その結果、次のような知見を得ることができた。

(1) 2種類の動機の領域は、まったく逆の関係にはなく、一次独立の関係にある。

(2) 字義的に対応すると予想された援助動機と非援助動機は、実際の関係構造において、必ずしも対応しておらず、かなり複雑な関係となっている。

これらは、援助行動の研究に際して、両動機の検討の必要性を示唆している。

キーワード：援助動機 非援助動機 動機構造 順社会的行動 援助行動 非援助行動
傍観者効果 援助出費 援助報酬 愛他主義

本研究に対して御協力いただいた小嶋外弘教授（同志社大学）に厚く感謝いたします。

[問 題]

Mussen & Eisenberg-Berg (1977) が指摘するように「なぜ人々は困っている他者を援助するのか、あるいは、援助しないのか」ということは、順社会的行動の研究において中心的な問題である。最近になってようやく、このような順社会的行動の動機を直接検討する研究が、いくつかなされるようになってきた (Eisenberg-Berg & Neal, 1979; Eisenberg-Berg & Hand, 1979; Moore, 1979; 松本・高木, 1981; 高木, 1983)。

Eisenberg-Berg & Neal (1979) は、4才児に自発的な順社会的行動の理由を推論させ、児童の示した理由を、11種類の理念的な動機のカテゴリーによって分類している。また Eisenberg-Berg & Hand (1979) は、4、5才の学齡前の児童に、順社会的な道徳的ディレンマを含む4つの物語を提示し、「主人公は何をなすべきか」、「それはなぜか」という道徳的判断を求めた。そして、児童の反応を7種類の動機カテゴリーによってコード化している。

Eisenberg-Berg らの研究とは異なり、Moore (1979)、松本・高木 (1981)、高木 (1983) は、多変量解析を用いた帰納的なアプローチから、順社会的行動の動機の構造を検討している。Moore (1979) は、大学生を被験者として、非援助動機間の非類似性評定点をもとに、非援助動機の構造を検討している。また松本・高木 (1981) は、非援助動機が非援助の理由になる程度の評定点をもとに、非援助動機の構造を検討している。さらに高木 (1983) は、援助動機が援助の理由になる程度の評定点をもとに、援助動機の構造を検討している。

このような研究によって援助動機と非援助動機の構造は、かなり明らかになってきた。しかしながら、これまでの研究においては、援助動機、あるいは、非援助動機の一方のみがとりあつかわれており、援助動機と非援助動機の関連性が明らかにされていない。援助動機と非援助動機の関係は、字義的には対称であり、正反対の関係である。しかしそのような関係が、被験者に知覚された次元においても実際に成り立つかどうか、その保証はない。それゆえに、援助動機と非援助動機とが互いにまったく逆の関係にあるのか、つまり互いに「一次従属」なのか、それとも、むしろ直交または斜交しながら互いに「一次独立」な関係にあるのかを確認する必要があると思われる。かりに、援助動機と非援助動機とが互いに一次従属で対称的な関係にあるとしたならば、援助動機もしくは非援助動機についてのどちらか一方の情報のみを研究者は得ればよいことになり、研究の効率化が計れるのである。

本研究は、この援助動機と非援助動機の関係が、一般に、一次独立であるのか、それとも一次従属であるのかの確認を行なうことを第一の目的とする。

さらに、この援助動機と非援助動機とがどのような関連構造を持っているのか、その関連構造を探索することを本研究の第二の目的とする。援助動機領域と非援助動機領域とが互いに一次従属であるにしても、あるいは一次独立であるにしても、それらの動機領域間には、ある種の潜在

的な関連構造が存在すると仮定できる。この関連構造を検討することによって、援助動機と非援助動機の根底に横たわり、それらを結びつける潜在的な諸変数を見い出す糸口が得られるかもしれない。少なくとも、この検討は、順社会的行動を理解する上において有用であると期待できる。

[方 法]

1. 被験者 大学生 191名（男子 83名， 女子 108名）
2. 質問紙 順社会的行動に共通する動機構造を探索するために、順社会的行動のクラスター（高木，1982）を代表する12種類の援助行動と12種類の非援助行動を選択した（表1参照）。援助動機項目としては、高木（1983）の25項目を、また非援助動機項目としては、松本・高木（1981）の26項目を使用した。援助動機項目に関しては、その項目の各内容が12種類の順社会的行動のそれぞれにおいて、どの程度その生起理由になると思うかを、「非常になる」、「少しなる」、「どちらともいえない」、「あまりならない」、「まったくならない」の5段階尺度によって被験者に評定させた。一例をあげると、次のようになる。

「自動車が故障して、困っている人（Y）がいたので、（X）はその人を手助けしました。」

この（X）の（Y）に対する行動について、次の項目の各内容がどの程度その生起理由になると思いますか。5段階で評定して下さい。

表1 順社会的行動のクラスターと本研究で用いた12種類の順社会的行動

No.	クラスター名	本研究で用いた順社会的行動
1	寄付・奉仕行動	困っている人のためのボランティア活動に参加する
2	分与行動	困っている人に自分の持物を分け与える
3	緊急事態における援助行動	乱暴されている人がいたので、その人を助けるために警察へ通報する
4	努力を必要とする救助行動	自動車が故障して困っている人がいたので、その人を手助けする
5	迷子・遺失者に対する援助行動	迷子がいたので、その子を交番に連れていく
6	社会的弱者に対する援助行動	電車の中に重そうな荷物を持っている人がいたので、その人のためにその荷物を網棚にのせる 子供が自転車でころんだので、その子を助けおこす 身体の不自由な人が困っていたので、そのひとのために援助の手をさしのべる
7	小さな親切行動	カメラのシャッター押しをたのんでくる人がいたので、シャッターを押す 雨の日、カサを持ってなくて困っている人がいたので、その人にカサをさしかける 小銭がなくて困っている人がいたので、両替をする 自動販売機の使い方がわからなくて困っている人がいたので、その人に自動販売機の使い方を教える

非援助動機項目に関しても同様に、その項目の各内容が12種類の順社会的行動のそれぞれにおいて、その非生起の理由にどの程度なるとするかを被験者に5段階尺度で評定させた。

3. 実施 教示を徹底させるために、調査は、被験者を5～10名ずつの小集団に分けて、集団法で実施した。なお、順序効果を相殺するために、項目の配列を4種類、行動の呈示順序を8種類の合計32通りの順序パターンを作り、被験者をそのパターンにランダムに割りあてた。

[結 果]

1. 援助動機領域と非援助動機領域の関係（一次独立か、それとも一次従属か）の検討

援助動機項目、非援助動機項目のそれぞれが行動原因に「非常になる」から「まったくならない」までの評定に対して5点から1点を配点した。この得点をもとに、援助動機項目と非援助動機項目とを込みにした項目間相関行列を作成した。この相関行列は、援助動機項目間相関行列、非援助動機項目間相関行列、そして、援助動機項目と非援助動機項目との相関行列を成分とする超行列である。特に、この超行列における援助動機項目と非援助動機項目との相関行列に注目すると、他の部分に比較して、各相関係数が著しく小さい（最大値、.309）。また、グループ主軸法（芝、1967）を用いて、援助動機領域内と非援助動機領域内のそれぞれの等質性を検討したところ、 α 係数は、.793、.874といずれもかなり高い値を示し、各動機領域内の等質性が保証された。また、援助動機領域と非援助動機領域との相関は、-.025とかなり低かった。この事実は、援助動機領域と非援助動機領域が互いに一次独立であり、しかもほぼ直交していることを示している。

さらに、援助動機項目と非援助動機項目を込みにした相関行列に主因子法による因子分析を適用し、固有値が1.0以上の因子を有意とする Guttman (1954) の基準により、13個の因子を抽出した。この13因子解に、direct oblimin 法 (Jenrich & Sampson, 1966) によって斜交回転を施し、回転後の因子負荷行列、因子構造行列、因子間相関行列を検討することによって、因子の解釈を行なった。回転後の因子負荷行列を表2に示し、回転後の因子間相関行列を表3に示す。表2をみると、援助動機項目だけ、あるいは非援助動機項目だけが高く負荷するのではなく、いずれかの援助動機項目と非援助動機項目がともに.300以上で負荷する因子は、第9因子と第11因子であることがわかる。また、因子構造においても同様に、因子と.300以上の相関係数を持つ項目が援助動機領域と非援助動機領域の両方に存在する因子は、第9因子と第11因子である。

第9因子、第11因子に.300以上の負荷量を持つ動機項目、およびその項目と因子との相関係数を以下詳しくみてみる。まず、第9因子の場合、援助動機領域の「援助する能力や資格が自分にあると思ったから (.434)」と、非援助動機領域の「援助する能力や資格が自分にならなと思ったから (.590)」、「今までに援助したことがなかったから (.392)」がある。これらから判断する

(表2のつづき)

非 援 助 動 機	F I	F II	F III	F IV	F V	F VI	F VII	F VIII	F IX	F X	F XI	F XII	F XIII	H
その時の気分が悪かったので	.012	-.149	-.104	.016	-.128	.001	.249	.037	.163	-.162	-.131	.015	.037	.215
自立つのが恥ずかしかったので	.529	.054	.039	.009	-.087	.053	.261	.033	-.060	.003	-.092	.007	.152	.368
今までに援助を求めて拒否されたことがあったから	.079	-.022	-.014	.056	.054	.065	.074	.086	-.074	-.047	-.631	-.019	.048	.376
(Yが)速く離れていたから	.178	-.042	-.005	-.140	-.041	.013	.400	-.025	-.018	-.091	-.153	-.101	-.042	.309
誰一人として援助しようとしなかったから	.622	.028	.007	.048	.064	.024	-.084	.084	.011	-.033	-.052	-.004	-.017	.375
自業自得であり、自分に関係ないと思ったので	.064	-.002	.062	-.035	.061	.653	-.134	.031	-.023	-.108	.002	-.037	.032	.433
他者がどのように思うか気にならなかったから	.144	-.036	-.054	-.016	-.012	.228	-.008	.064	-.095	.003	-.172	-.185	.264	.269
援助しないためにこらむコストが小さかったから	.127	-.028	-.056	-.015	.010	.209	-.165	.086	.400	-.055	-.128	-.383	.250	.369
(Yが)自分の知らない人だったから	.484	-.106	.108	-.049	.009	.158	-.024	-.094	.002	-.147	-.066	-.010	.022	.408
援助が必要だと思わなかったから	-.086	.092	-.019	.065	-.031	.497	.286	-.050	.082	.011	-.070	.034	-.101	.278
自分以外にも誰かそこにしたので	.465	-.024	-.069	-.226	.054	.013	.035	.029	-.011	-.085	-.055	-.184	-.148	.373
自分の難癖は自分で切り抜けるべきだと思ったので	-.044	-.001	.028	.027	.010	.717	-.003	.016	.018	-.011	-.028	.007	.056	.408
報酬や返礼が期待できなかつたから	.144	-.181	-.016	.025	-.015	.332	-.300	.126	.070	-.106	-.093	-.060	.006	.366
(Xが)思いやりのない利己的な人だから	-.050	.157	.033	.020	-.022	-.164	.024	-.010	.054	-.487	-.043	-.082	-.018	.270
関わりたくなかつたから	.395	.200	-.028	.003	-.042	.093	-.092	.053	.087	-.182	.046	-.309	-.081	.454
援助する能力や資格が自分にならなかつたから	.066	-.029	-.011	.096	.017	.101	.043	-.011	.586	.019	.020	-.068	-.034	.260
今までに援助に失敗していやな気持ちになつたことがあつたから	.023	.005	-.036	.023	.012	.012	.072	.073	.033	-.140	-.615	.009	-.036	.400
面倒だったから	.214	-.012	-.083	.108	-.180	.136	-.029	-.088	.088	-.174	.021	-.431	.100	.455
今までに援助したことがなかつたから	.456	-.038	-.063	-.004	.014	-.012	.124	-.034	.330	.019	-.169	-.003	-.012	.365
(Yが)好ましくない特徴を持っていたので	.047	-.074	.057	.005	.042	.109	-.047	-.032	-.064	-.798	-.003	.104	.009	.578
直接援助を要請されなかつたので	.239	-.151	.037	-.065	-.091	.140	.130	-.156	.125	-.074	-.088	-.102	-.049	.304
(Yが)嫌いな人だから	-.018	-.079	.068	-.008	.035	.094	-.012	.001	-.075	-.873	-.003	.109	.037	.601
他の人が援助していたので	.023	.016	-.009	-.247	.027	-.028	.200	-.059	-.002	-.043	-.229	-.184	-.228	.250
援助に必要なコストが大きかつたので	-.044	.171	-.013	.206	.113	.145	.021	.149	.236	-.131	-.111	-.306	.033	.303
援助する義務が自分にならなかつたので	.178	.066	-.018	.037	-.093	.483	-.013	-.083	.136	-.091	.035	-.095	-.043	.397
おせっかいと思われなくなつたから	.338	.069	-.007	-.006	-.115	.206	.299	-.027	-.114	-.022	-.147	.001	.054	.360
固 有 値 (EIGEN VALUE)	6.921	4.399	2.752	2.602	1.778	1.711	1.635	1.534	1.345	1.245	1.183	1.059	1.023	29.186
寄 与 率 (PCT OF VAR)	13.6	8.6	5.4	5.1	3.5	3.4	3.2	3.0	2.6	2.4	2.3	2.1	1.9	57.2

表3 回転後因子間相関行列

	F I	F II	F III	F IV	F V	F VI	F VII	F VIII	F IX	F X	F XI	F XII	F XIII
F I	1.000												
F II	.006	1.000											
F III	-.057	.008	1.000										
F IV	.007	-.232	-.159	1.000									
F V	-.117	-.147	-.184	.195	1.000								
F VI	.316	-.100	-.052	.065	-.119	1.000							
F VII	-.005	-.073	-.010	-.130	.000	.070	1.000						
F VIII	.026	-.086	.132	-.025	-.196	.132	-.053	1.000					
F IX	.078	.074	.044	.058	-.105	.086	-.018	.159	1.000				
F X	-.231	.006	-.251	.014	.105	-.268	-.150	.006	-.120	1.000			
F XI	-.311	-.079	-.051	.024	.217	-.208	-.093	-.085	-.243	.262	1.000		
F XII	-.233	.207	.004	.008	-.066	-.223	-.104	.085	-.029	.358	-.152	1.000	
F XIII	.026	.032	.054	.071	-.010	.010	-.106	.087	.100	.024	-.059	.027	1.000

と、この因子は、「援助の能力や資格」に関係していることがわかる。また、第11因子についてみると、援助動機領域の「今までに援助に成功して良い気持ちになったことがあったから（-.427）」、「今までに援助されたことがあったから（-.325）」と、非援助動機領域の「今までに援助に失敗していやな気持ちになったことがあったから（-.674）」、「今までに援助を求めて拒否されたことがあったから（-.668）」がある。これらから判断すると、この因子は、「援助や被援助の経験」に関係していると思われる。

つぎに、表3に示されている因子間相関係数から両動機間の関連性を検討する。因子間の相関係数の絶対値が最大であった因子対は、第10因子と第12因子（.358）であり、2位から5位まで順に因子対を示すと、第1因子と第6因子（.316）、第1因子と第11因子（-.311）、第6因子と第10因子（-.268）、第10因子と第11因子（.262）となる。表2によると、相関係数の絶対値が最大であった第10因子と第12因子は、ともに非援助動機項目のみが高く負荷する因子である。また、2位である第1因子と第6因子、4位である第6因子と第10因子も、すべて非援助動機項目のみが高く負荷する因子である。しかしながら、3位の因子対である第1因子と第11因子、および5位の因子対である第10因子と第11因子の場合、第1因子、第10因子とも非援助動機項目のみが高く負荷する因子であるが、第11因子は援助動機項目と非援助動機項目がともに高く負荷する因子である。この後者の事実は、援助動機と非援助動機との関連性をいく分暗示している。また、因子間相関係数の絶対値の大きさが8位である第3因子と第10因子（-.251）と、14位である第2因子と第12因子（.207）の2つの因子対では、第2因子、第3因子が援助動機項目のみが高い負荷を示す因子、第10因子と第12因子が非援助動機項目のみが高い負荷を示す因子であることから、援助動機と非援助動機の関連性が一層暗示される。第3因子と第10因子、第2因子と第12因子に.300以上の負荷量を持つ動機項目、およびその動機項目と因子との相関係数は、以下のと

おりである。すなわち、第3因子については、援助動機領域の「(Yが)好きな人だったから (.881)」、 「(Yが)好ましい特徴を持っていたので (.665)」、 「(Yが)自分の知っている人だったから (.598)」があり、第10因子については、非援助動機領域の「(Yが)嫌いな人だから (-.858)」、 「(Yが)好ましくない特徴を持っていたので (-.798)」、 「(Xが)思いやりのない利己的な人だから (-.492)」がある。また、第2因子については、援助動機領域の「援助が必要だと思ったので (.624)」、 「気の毒に思ったので (.621)」、 「援助する義務が自分にあると思ったので (.586)」があり、第12因子については、非援助動機領域の「面倒だったから (-.572)」、 「援助しないためにこうむるコストが小さかったので (-.474)」、 「関わりたくなかったから (-.426)」、 「援助に必要なコストが大きかったので (-.357)」がある。

このように、この分析によって援助動機と非援助動機との関連性がいくらか暗示された。しかしながら、全体的にみると援助動機領域と非援助動機領域との関連性はあまりないと思われる。このことは、援助動機項目と非援助動機項目がともに高く負荷する因子の固有値や寄与率があまり高くないことや、援助動機項目のみが高く負荷する因子と非援助動機項目のみが負荷する因子との間の因子間相関係数がそれほど高くないことからもうかがえる。少なくとも援助動機と非援助動機は、まったく逆の関係、すなわち互いに一次従属であるのではなく、互いに一次独立であるといえよう。

この因子分析によって、援助動機と非援助動機との関連構造が示唆されたが、援助動機項目と非援助動機項目を込みにしたこのような方法では、援助動機領域内、非援助動機領域内の等質性が高いために援助動機と非援助動機との関連構造を見だしにくくさせている危険性が多分にある。したがって、援助動機と非援助動機の関連構造をとらえることを目的とするならば、正準相関分析によるアプローチの方が解釈の点で容易であり、有効性が高いと思われる。

2. 援助動機と非援助動機との関連構造の検討

援助動機項目と非援助動機項目とを込みにした項目間相関行列に対して、援助動機領域と非援助動機領域との相関が最大になるような合成変量の対をもとめる正準相関分析を行なった。表4に示した第8正準変量までの正準相関係数と各次元ごとに累積した冗長性 (Stewart & Love, 1968) をみると、正準相関係数はやや高いが、冗長性は極めて低いことがわかる。これは、援助動機領域と非援助動機領域とが、合成変量のレベルでは比較的よく関連しているが、個々の動機のレベルではあまり関連性が強くないことを示している。

表4 正準相関係数と累積冗長性

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
正準相関係数	.549	.445	.429	.390	.374	.349	.309	.290
累積冗長性	援助	.021	.038	.049	.056	.067	.073	.078
	非援助	.016	.032	.050	.065	.073	.079	.089

表 5 回転後正準変量間相関行列

	I	II	III	IV	V	VI
I	.507					
II	-.026	.444				
III	.022	-.018	.386			
IV	.039	-.021	.027	.406		
V	-.001	-.018	.003	-.007	.386	
VI	-.034	-.018	.010	-.007	-.035	.407

このような結果にもかかわらず、合成変量のレベルで援助動機と非援助動機の関連をみることは、なお必要であると考え。そこで、つぎに正準変量の解釈に焦点をあてることによって、両動機間の関連構造の探索を試みる。

正準変量の解釈は、従来から困難であると指摘されている (Bentler & Huba, 1982 ; Cliff & Krus, 1976 ; Nie, Bent & Hull, 1970)。そこで、構造行列の単純構造化を計り、解釈可能性と有意性 (Cliff & Krus, 1976) を高めるためにそれらの変量の回転を行なうことにした。回転に用いる正準変量の選択は、Bentler & Huba (1982) の基準にしたがった。すなわち、それは、(1)固有値の推移のブレイク (cf. Cattell, 1966) と、(2)正準相関係数の大きさである。Bentler & Huba (1982) は、一般に、正準相関係数が .35 以上の変量に対して、回転を行なうことを提案している。そこで、これらの基準をみたま第 6 正準変量までを採用した。なお、回転は、Varimax 基準 (Kaiser, 1958) をみたますように一対の構造行列を同時に回転させる Hakstian (1976) の方法に従った。

回転後の正準変量間相関行列は表 5 に、回転後の正準構造行列は表 6 に示す。表 5 をみると、この正準変量間相関行列の非対角要素のすべてが、ほとんど 0.0 に近いことがわかる。このことは、互いに異なる次元の変量は回転後も相関していないことを示している。なお、この対角要素は対応する次元での相関 (正準相関) を示す。

表 6 には、正準負荷量の絶対値が .400 以上のものをイタリック体にして示されているが、それらを手がかりに各変量の解釈を行なう。

まず、第 1 正準変量については、援助動機領域の「自分の他に誰もそこになかったので (.645)」, 「(Y の) の近くにいたので (.584)」, 「援助をもとめる原因がむしろ自分にあり、援助の責任を感じたので (-.438)」という動機項目に高い負荷がみられ、非援助動機領域の「援助する能力や資格が自分になかったので (-.518)」, 「他の人が援助していたので (.454)」, 「援助に必要なコストが大きかったので (-.437)」, 「自分以外にも何人かそこにいたので (.427)」という動機項目にも高い負荷がみられる。

この変量対を検討すると、「援助の責任」や「援助する能力や資格」の判断と負の方向で相関しており、「誰もそこになかったので」, 「近くにいたので」援助し、「他の人が援助していたの

表6 援助動機と非援助動機の関連構造(回転後正準構造行列)

援助動機	I	II	III	IV	V	VI
報酬や返礼が期待できたから	-.213	-.051	-.113	-.522	-.141	-.226
無意識に	.349	.127	.256	-.029	-.223	-.021
その時気分が良かったので	.103	-.116	.021	.017	.022	-.743
今までに援助に成功して良い気持ちになったことがあったから	.122	.028	-.700	-.288	-.181	-.269
援助が必要だと思ったので	.212	.126	-.203	-.006	-.662	.011
援助を求め原因がむしろ自分にあり、援助の責任を感じたので	-.438	.188	-.105	.382	-.370	.051
他の人が援助していたので	-.346	.196	-.045	-.486	-.283	.143
今までに援助したことがあったので	.016	.360	-.587	-.201	-.110	.135
気の毒に思ったので	.274	-.078	-.088	-.088	-.637	-.013
自分の他に誰もそこになかったので	.645	.088	.017	.070	-.180	.111
援助する義務が自分にあると思ったので	-.040	.174	.038	-.009	-.676	.062
援助しないためにこらむコストが大きかったので	-.303	-.058	-.143	-.125	-.032	.049
(Xが)思いやりのある愛他的人だから	.035	-.379	-.367	.026	-.430	-.136
直接援助を要請されたので	.214	-.149	-.102	.334	.038	-.090
何か良いことをしてみたら良かったから	-.044	.041	-.282	-.298	-.282	-.566
他者の目が気になったので	-.003	.002	-.086	-.364	-.343	-.175
援助に必要なコストが小さかったので	-.035	-.121	-.213	.072	.106	-.353
援助する能力や資格が自分にあると思ったから	-.340	.237	-.029	.117	-.150	-.172
誰一人として援助しようとしなかったので	.298	.152	-.092	.164	-.312	.011
今までに援助されたことがあったから	.032	-.055	-.513	.012	-.126	-.038
(Yの)近くにいたので	.584	.150	-.057	.128	-.162	.017
(Yが)好ましい特徴を持っていたので	-.061	-.524	-.021	-.100	.075	-.090
(Yが)好きな人だったから	-.092	-.695	.056	.036	-.013	.103
(Yが)自分の知っている人だったから	.034	-.354	.003	.088	.026	.040
お互いに助け合わねばならないと思ったので	.025	.066	-.184	-.045	-.365	-.060

(表6のつづき)

	I	II	III	IV	V	VI
非援助動機						
その時の気分が悪かったので	-.110	.022	-.099	.019	.081	-.530
目立つのが恥ずかしかったので	-.020	-.082	-.163	-.398	-.273	-.311
今までに援助を求めて拒否されたことがあったから	-.158	-.110	-.590	-.117	-.078	-.176
(Yから)速く離れていたから	.347	-.162	-.181	-.038	-.132	-.332
誰一人として援助しようとしなかったから	.019	-.026	-.171	-.714	-.106	.142
自業自得であり、自分に関係ないと思ったので	-.078	-.222	.102	-.417	.080	-.277
他者がどのように思うか気にならなかったから	.013	-.085	-.165	-.292	.004	-.174
援助しないためにこらむコストが小さかったから	-.088	-.134	-.242	-.293	.112	-.184
(Yが)自分の知らない人だったから	.125	-.334	-.259	-.490	.145	-.019
援助が必要だと思わなかったから	-.051	.053	-.078	-.014	-.166	-.424
自分以外にも誰かそこにいたので	.427	-.006	-.130	-.388	-.062	-.075
自分の難儀は自分で切り抜けるべきだと思ったので	-.179	-.110	.050	-.216	.015	-.434
報酬や返礼が期待できなかったから	-.230	-.085	-.210	-.657	.298	-.248
(Xが)思いやりのない利己的な人だから	.011	-.532	-.235	.046	-.439	-.053
関わりたくなかったから	.141	-.209	-.104	-.579	-.376	-.187
援助する能力や資格が自分にならなかったから	-.516	.126	-.118	-.094	.100	-.177
今までに援助に失敗していやな気持ちになったことがあったから	-.130	-.112	-.719	-.078	-.188	-.213
面倒だったから	.360	-.179	-.277	-.344	.090	-.479
今までに援助したことがなかったから	-.114	.204	-.483	-.422	-.056	.081
(Yが)好ましくない特徴を持っていたので	-.002	-.720	-.060	-.221	.115	-.162
直接援助を要請されなかったから	.111	-.180	-.345	-.194	.241	-.394
(Yが)嫌いな人だから	-.033	-.827	-.065	-.109	.069	-.202
他の人が援助していたから	.454	-.113	-.344	.162	-.063	-.154
援助に必要なコストが大きかったから	-.437	-.252	-.152	-.152	-.241	-.216
援助する義務が自分にならなかつたから	-.072	-.055	.344	-.460	-.121	-.492
おせっかいと思われなくなつたから	.133	-.021	-.195	-.265	-.245	-.459

で」援助しないといった責任分散 (Latané & Darley, 1970) の可能性あるいはその不可能性を示す動機項目と正の方向で相関していることがわかる。

第2正準変量では、援助動機領域の「(Yが)好きな人だったから (-.695)」, 「(Yが) 好ましい特徴を持っていたので (-.524)」という動機項目に高い負荷がみられ、非援助動機領域の「(Yが) 嫌いな人だから (-.827)」, 「(Yが) 好ましくない特徴を持っていたので (-.720)」, 「(Xが) 思いやりのない利己的な人だから (-.532)」という動機項目にも高い負荷がみられる。この変量対は、明らかに被援助者や援助者の人格特徴に関連している。

第3正準変量では、援助動機領域の「今までに援助に成功して良い気持ちになったことがあったから (-.700)」, 「今までに援助したことがあったから (-.587)」, 「今までに援助されたことがあったから (-.513)」という動機項目に高い負荷がみられ、非援助動機領域の「今までに援助に失敗していやな気持ちになったことがあったから (-.719)」, 「今までに援助を求めて拒否されたことがあったから (-.590)」, 「今までに援助したことがなかったから (-.483)」という動機項目にも高い負荷がみられる。この変量対は、援助や被援助の経験に関連する動機項目とすべて同方向で相関している。

第4正準変量では、援助動機領域の「報酬や返礼が期待できたから (-.522)」, 「他の人が援助していたので (-.486)」という動機項目に高い負荷がみられ、非援助動機領域の「誰一人として援助しようとしなかったので (-.714)」, 「報酬や返礼が期待できなかったから (-.657)」, 「関わりたくなかったから (-.579)」, 「(Yが) 自分の知らない人だから (-.490)」, 「援助する義務が自分にならなかったと思ったので (-.460)」, 「今までに援助したことがなかったから (-.422)」, 「自業自得であり、自分に関係ないと思ったので (-.417)」という動機項目にも高い負荷がみられる。この変量対においては、援助に対する「報酬や返礼の期待」や、「誰一人として援助しようとしなかったので」あるいは「関わりたくなかったから」という非関与の状態を示すような非援助動機項目と同方向で強く相関している。

第5正準変量では、援助動機領域の「援助する義務が自分にあると思ったので (-.676)」, 「援助が必要だと思ったので (-.662)」, 「気の毒に思ったので (-.637)」, 「(Xが) 思いやりのある愛他的な人だから (-.430)」という動機項目に高い負荷がみられ、非援助動機領域の「(Xが) 思いやりのない利己的な人だから (-.439)」という動機項目にも高い負荷がみられる。この変量対は、援助の「義務」や「必要」性の認識や、「気の毒に思って」援助するという「共感や同情」に強く関連しており、非援助動機領域の動機項目とは、それほど強く関連していない。

第6正準変量では、援助動機領域の「その時気分が良かったので (-.743)」, 「何か良いことをしてみたかったから (-.566)」という動機項目に高い負荷がみられ、非援助動機領域の「その時気分が悪かったので (-.530)」, 「援助する義務が自分にならなかったと思ったので (-.492)」, 「面倒だったから (-.479)」, 「おせっかいと思われたくなかったから (-.459)」, 「自分の難儀は自分で切り抜けるべきだと思ったので (-.434)」, 「援助が必要だと思わなかったから (-.424)」

という動機項目にも高い負荷がみられる。この変量対は、「気分の良い，悪い」に強く関連しているといえる。

〔考 察〕

本研究は、援助動機と非援助動機が、字義的には、まったく逆の関係にあるにもかかわらず、被験者に知覚された次元では、まったく逆の関係にではなく、ほぼ独立な関係にあることを明らかにした。このことは、順社会的行動の生起過程を研究する際に、促進要因と思われる援助動機と抑制要因と思われる非援助動機とを共に検討してゆかねばならないことを暗示している。

順社会的行動の初期の研究は、Latané & Darley (1970) の研究にみられるように、緊急事態での傍観者効果などを中心にとりあつてきた。そのためこの種の研究は、なぜ人々が緊急事態に介入して援助を行なわないのかという援助の抑制要因を明らかにしてきた。しかしその後、研究者は、個人の援助行動を促進する、あるいは、抑制する要因に主たる関心に向け (Berkowitz, 1972)、この行動の生起に影響する要因をかなり明らかにしてきた。ところが、促進要因と抑制要因の関係は、ほとんど明らかにされていない。したがって、今後、促進要因と思われる援助動機と抑制要因と思われる非援助動機の矛盾・拮抗のダイナミクスを解明することによって、援助行動と非援助行動の理解や予測がさらに促進されることが期待できよう。

本研究では、援助動機と非援助動機との関連構造を正準変量によって解釈した。ここでの問題点としてまず挙げられることは、冗長性が低いのに正準変量を解釈した点である。このことは、互いにあまり相関のない援助動機と非援助動機とを、無理に関連させたともいえる。しかしながら、Baston & Coke (1981) が指摘するように、我々が援助するかどうかの意思決定をする際、援助しようとする動機（愛他的動機）と援助をしないでおこうとする動機（利己的動機）の2つが同時に存在し、そして時には、この2つの動機が拮抗し葛藤することもあると考えられる。このような観点にたてば、本研究において、冗長性の低い正準変量を解釈した意味がみいだせるのではなからうか。

確かに、回転後のこの正準変量は、順社会的行動の理論ともマッチした形で解釈可能であった。たとえば、第1正準変量を検討すると、この変量対は、責任分散の可能性あるいはその不可能性と正の方向に関連し、援助の責任や能力と負の方向で関連していた。このような知見は、Latané & Darley (1970) の責任性の分散仮説や Schwartz & Howard (1981) の言う責任性の“salience”の問題と対応している。また第2正準変量においても、援助動機領域、非援助動機領域ともに、被援助者、援助者あるいは非援助者の人格特徴と同方向で関連しているし、第3正準変量も、援助や被援助の経験と関連がみられ、援助動機領域、非援助動機領域とも、同方向で相関している。第4正準変量以下は、やや解釈が困難であるが、おおむね、正準変量による援助動機と非援助動機の関連構造の探索は、超行列を因子分析して解釈することよりも一層有意義

であったように思われる。

最後に本研究では、援助動機と非援助動機とが一義的にほぼ独立であり、正準相関分析における冗長性を低める結果になったことが示されたが、このことは、被験者の持つ社会的望ましきなどのある種のバイアスがかかっていたからかもしれない。この問題点は今後十分に検討される必要があるだろう。

[結 論]

本研究は、順社会的行動 (prosocial behavior) を促進させると思われる援助動機とその行動を抑制させると思われる非援助動機とがどのような関連性を持っているのかを検討した。被験者は、大学生の男女 191 名であった。被験者は、12種類の順社会的行動のそれぞれについて、25種類の援助動機がどの程度その生起理由になると思うか、また26種類の非援助動機がその非生起理由にどの程度なると思うかを5件法で評定した。その評定値をもとに、動機項目間の相関係数を求めた。そして、その相関係数による検討に加えて、因子分析法、グループ主軸法、正準相関分析法などの多変量解析法を用いた援助動機と非援助動機の関連性の検討も行なった。

このような方法によって得られた結果は、つぎのようなものであった。

1. 援助動機領域と非援助動機領域は、まったく逆の関係にあるのではなく、互いに一次独立な関係にある。
2. 援助動機領域と非援助動機領域との相関を最大化させる合成変量を検討すると、字義的にみて、いくつかの類似する意味の動機や、あるいはまったく逆の意味の動機によって、その合成変量が形成されると予想されたが、実際には、そうでない場合の方が多かった。つまり、字義的に対応している援助動機と非援助動機が必ずしも対応していなかったのである。

このような結果から、順社会的行動の生起過程を研究する際に、研究者は、促進要因と思われる援助動機と抑制要因と思われる非援助動機をともに検討してゆかねばならないことが示唆された。

引用文献

- Baston, D. & Coke, J. S. 1981 Empathy: A source of altruistic motivation for helping? In J. P. Rushton & R. M. Sorrentino (Eds.) *Altruism and helping behavior: Social, personality, and developmental perspectives* Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Bentler, P. M. & Huba, G. J. 1982 Symmetric and asymmetric rotations in Canonical correlation analysis: New methods with drug variable examples. In N. Hirschberg & L. G. Humphreys (Eds.) *Multivariate applications in the social sciences*. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Berkowitz, L. 1972 Social norms, feelings, and other factors affecting helping and altruism.

- In Berkowitz (Ed.) *Advances in experimental social psychology*. Vol. 6. New York: Academic Press.
- Cattell, R. B. 1966 The scree test for the number of factors. *Multivariate Behavioral Research*, 1, 245—276.
- Cliff, N. S. & Krus, D. J. 1976 Interpretation of canonical analysis: Rotated vs. unrotated solutions. *Psychometrika*, 41, 35—42.
- Eisenberg-Berg, N. & Hand, M. 1979 The relationship of preschools' reasoning about prosocial conflicts to prosocial behavior. *Child Development*, 50, 356—363.
- Eisenberg-Berg, N. & Neal, C. 1979 Children's moral reasoning about own spontaneous behavior. *Developmental Psychology*, 15, 228—229.
- Guttman, L. 1954 Some necessary conditions for common factor analysis. *Psychometrika*, 19, 149—162.
- Hakstian, A. R. 1976 Two-matrix orthogonal rotation procedures. *Psychometrika*, 41, 267—272.
- Jenrich, H. & Sampson, P. F. 1966 Rotation for simple loadings. *Psychometrika*, 31, 313—323.
- Kaiser, H. F. 1958 The varimax criterion for analytic rotation in factor analysis. *Psychometrika*, 23, 187—200.
- Latané, B. & Darley, J. M. 1970 Social determinants of bystander intervention in emergencies. In J. Macauley & L. Berkowitz (Eds.) *Altruism and helping behavior*. New York: Academic Press.
- Nie, N., Brent, D. H. & Hull, C. H. 1970 *Statistical package for social sciences*. New York: McGraw-Hill.
- 松本 敦・高木 修 1981 順社会的行動の動機の構造—(2)非援助動機について—。日本グループダイナミックス学会第29回大会発表論文集, 40—41.
- Moore, D. 1979 The structure of motives for not helping. Paper presented at the 87th annual convention of the American Psychological Association, New York.
- Mussen, P. & Eisenberg-Berg, N. 1977 *Roots of caring, sharing, and helping*. San Francisco: W. H. Freeman & Co. 菊池 (訳) 1980 *思いやりの発達心理* 金子書房
- Schwartz, S. H. & Howard, J. A. 1981 A normative decision-making model of altruism. In J. P. Rushton & R. M. Sorentino (Eds.) *Altruism and helping behavior: Social, personality, and developmental perspectives* Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- 芝 祐順 1967 *行動科学における相関分析法* 東京大学出版会
- Stewart, D. K. & Love, W. A. 1968 A general canonical correlation index. *Psychological Bulletin*, 70, 160—163.
- 高木 修 1982 順社会的行動のクラスターと行動特性 *年報社会心理学*, 23, 137—156. 勁草書房。
- 高木 修 1983 順社会的行動の動機の構造 *年報社会心理学*, 24, 187—207. 勁草書房。